

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
（毎月一回・十五日発行）

（通第九十一号）

目

次

心に映ることども	花田正夫…(1)
往生について	福島政雄…(5)
浄土真宗に帰すれども	西元宗助…(10)
法信抄その他	(12)

# 慈光

第八卷

第十號

# 心に映ることども

花田正夫

静かな朝、池辺に立つて無心に眺めてみると、水面に種々様々の雲の姿が現れてはまた消えて行く。私自身心筋障害と宣告されて以来、一面壁九年のまねごとをなし、草庵に六年の春秋を送り迎へ、其間、来訪下さる方々や、書信の往復を縁として、世の移り変りが断片的に心に映つて、夫々に教へられることが多い。その幾つかを拾つて今秋の記念としたい。

電子顕微鏡による微生物の研究を続けていられる京大医学部のHさんが、二ヶ年の米國留学を終へて、草庵に一泊せられたことがある。その時の米國への感想談に

『日本は永年の間、歐洲文明に学んだために、新進の米國を一段下位に見るやうに慣らされてゐるが、今度の大戰以來、世界は變つた。膨大な資源を持つ米國は世界の學者を招聘して、今や最高の文化國家をきつきつつある。だから

スパルタ、アテネの名は今日なほ世に知られてゐるが、その文化が地中海の沿岸に潤うた頃、ローマの大帝國が誕生し、クすべての道はローマに通じる々と豪語し、ギリシヤの國々は没落した。

然しそのローマの文明が北上して歐洲に文化の華と咲き乱れた時、すでにローマ帝國は崩壊し去つた。

斯うして仏・獨・英の三国は世界の先進國として夫々に發展した。フラハスは世界の美術の殿堂と稱へられ、英國は大海軍力をもちユニオンジャックの國旗を世界の七つの海の何処にもはためかして海上を制覇し、ドイツはまた科学に哲学に工業に第一人者が続出して、世界の優秀國民として最高水準を歩みつづけた。

然し、今次の大戦争によつて世界は變つた。英・仏・獨は、原爆、水爆の製造と共に、新進國、米・ソの兩國に対して世界への發言權を喪失しここに歐洲文明の没落は事実となつて迫つてきた。』  
と詳説されてゐる。

さて、現在勝ち誇つてゐる國家群と雖も、やがて没落に頻するのは理の当然である。それは恰も個人の世界において「生ある者の必ず死に歸し、盛んなる者の遂にはおとろふる」といふ大道理からまぬかれることは出来ないと同様である。國家の興亡盛衰も、永い人の世の歴史の上に繰り

ら日本では留学と云へば歐洲を憶れる風潮が今なほあるが、それはもう過ぎ去つてゐる。今はいたづらに歐洲文化にのみ憶れるべきではない云々』  
と述懐されたことがある。

一昨年、中共地区から引揚げた、所謂學者グループの一人は、雜誌やら、書信で、

『中共は面目を一新した。やがて台灣も解放される日も近いと信じてゐる。日本人も速かにめざめなないならば、完全な落伍者の惨めな位置に取り残されて了ふと思ふ云々』と警告して下さる。

次に、教育者の一人からは非に読めと勧められた、歐洲文明の没落を問題にした書に

『三千年の昔、ギリシヤに世界の文明の光が射し始め、

返された波動であり、これからまた果しなく続く浮沈である。

して見れば、没落の悲運にある者も、隆盛の勝運に居る者も、その波浪の浮沈によつてゆるがぬ、心のよるべを見出さなければ、一日として、一刻として安住の時はない。それだからといって、我々は何時かは亡びるのであるからとて、現状をそのままに放棄せよといふのではない、病む者がその病を根治するために精根をつくすやうに、あらゆる國々も人々も無限に努力しなければならぬ。

然し、その努力だけでは遂には大失望はまぬがれない。そこに、生もよし、死もよし、といふ底の抜けたところを一つ得なければならぬ。むしろそこを究めてのちに、人生の萬端を力相應に善所して行くことも出来る。この心境は「天命を知りて人事をつくす」といふ一句につきる。「人事をつくして天命を待つ」といふのではない。我々が「人事をつくした」などとほさう軽々しく言へるものではない。それは愛児を亡くした親が、あくもしてやつたら、かうもして居たらと長い年月の間自分の思慮の足らなさを悔いる声を聞けばよく解ることである。これに反して

この秋は、雨か嵐か知らねども  
今日のたづきに 田草とるなり

と云ふゆとりある努力が「天命を知つて、人事をつくす」姿である。人生は仮の宿といふ。その通りで究極の

棲み家ではない。然し、仮の住み家だといつて荒れ放ちにするのであれば仮の宿にもならぬ。仮の宿を仮の宿と知つて、しかも大切に護り整へる時、仮の宿が仮の宿としての面目を發揮出来る、その境界を「天命を知つて人事をつくす」と申すのである。

さて「天命」とは儒者の言葉で、「天」といふ一字でもその道の人々には何十何百といふ解釈があるし、「命」の一字も亦その様であるが、私はこれを換骨脱体して「業報」と解しておく。

その業報の主要なものには「生があれば、必ず死がある」。 「興があればまた必ず亡がある」といふことである。それを、仕様のないこと、どうにもならぬこととして捨ておくのであれば、業報まかせて救ひの光はない。それなら解決が出来るかといへばどうにもならぬ。して見れば、その業報の一切を身一つにうけて、然もそれによつて減することのない光明が与へられさへすれば、ほんたうに「業報を業報として受けとることが出来る」即ち業報を業報として休解出来るのである。

岡山の愛生園にAさんが居る。彼は初め癩疾におかされて祈りに祈つたけれども病状は悪化するばかりで、遂に愛生園に入園の決心をして、檀那寺の御住職を訪うて別離の

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業は さもあらばあれ

とは、身辺多事多難の中から詠ぜられた池山先生の信味あふれる道歌である。

日本に生れた者の幸慶は、智識、先輩の上に、そのことが実証されてゐる。さういふ人々を持つてゐるといふことである。

それでは、その難関がどのやうにして越えられるかと申せば、ここに一人の不具者が居るとする。この不具者は、何処へ行つても皆からさげすみの眼と冷い憐みの眼を注がれる。さういふ冷い風の中にさらされて暮すことは身心共に凍りつく。然しこの不具者も、その不具なことも、その不具になやむ切ないところもすべて知りつくされて、無限の同情をもつて看護り続けて下さる方さへあれば、そこに光明が射し、不具者が不具者のなりに生きて行ける道がひらけて来る。然も仏は不具者が完全無缺な身になる日まで照護して下さい。

釈尊を始めとして三国七高僧の方々は、この無限の同情者、深い理解者が、ましますことと、その名が阿弥防仏でましますことを教へて下さるのである。

挨拶をすると、夜を徹して仏陀の大悲を語られ、それが縁になつて、念仏の人となつた。そして入園と共に一層に仏道を求め、信眼やうやくにひらけると共に、すでに同君は失明してゐたが、沢山の失明の人々にこの仏陀の大悲心をどうかして伝へたいとの一念から、点字を学び、仏典を点字訳して、盲人の心の窓を開き続けて居られる。

仏陀の大悲心の照曜するところ、業報を業報として休解され、その業報を縁としていよ／＼深広無涯底なる仏心を仰いで、やがてそのまま、自分と同じ業報を持つ人々に「ここに光あり、ここに不滅のよるべあり」と叫ばずには居られないのである。

さて、没落をさだめとする国々の中に生活する一人一人は、そこになくなつてはならぬのは、その悲運をこえる力である。それは一度病んで、その病から何時までも解放されぬ病者が、不治の痼疾を持つたまま、そこをこえて行ける力を絶対に必要とすると同様である。

然しどんなに必要缺くべからざるものといへども無いものは無いので、無い袖は振ることは出来ない。然るに幸にもその可能が実現してゐる。「念仏者は無碍の一道なり」とは九十年の御生涯を絶対信ひとつで貫かれた親鸞聖人の金言である。

### 人生の渡し場

年流れけりこの川をひとたび越えしその日より入り日に映ゆる岸の城 堰に乱るる水の声

同じ小舟の旅人は 二人の友とわれなりき

一人はおもわ父に似て 若きは希望に燃えたりき

一人は静けく世にありて 静けきさまに世を去りつ若きは嵐のなかに生き 嵐のなかに身を果てぬ

幸多かりしそのかみを しのべば死の手にうばはれしいととき友の亡きあとの さびしき胸にせまるかな

さは友垣 結うすべは 霊と霊との語らひぞかの日の霊の語らひに 結びしきずな解けめやも

受けよ舟人 舟代を 受けよ三人の舟代を

二人の霊とうち連れて ふたたび越えぬこの川を

ネッケル河を渡りて

ルードウィツヒヴァーランド作

(週間朝日抜)

# 往生についで

福島政雄

これも前に申し上げたやうに思ひますが、もう三十何年も前でありませうか。仏の御浄土といふことを大分問題にされたことがあります。この時、或仏教の雑誌でお浄土といふ問題について、どういふ風に考へてゐるか、すこし書けと云はれました。その特別に私はむづかしい理窟を云ふことも何もありませんでしたが、長女が死んだあとでありましたし、お浄土といふ感じを持つて居りました。

といふのは、長女は四つで死にましたけれど、最後の時に、自分の家を否定しまして、  
「早くおうちへかへりませう」  
と申します。さうすると家内が抱きまして  
「ここが和ちやんのお家ですよ」  
と云ひますけど  
「いゝえ、さうではないの。スグにお家へかへりませう。早くお家へかへりませう」  
といふのが最後の言葉でございましたし、それから、それは八月であり、その同じ月に、近角常観先生が矢張り小

一味になつてこの私を始終照してはくんでいつてゐると云ふ、かういふ感じになつたのであります。  
さういふことで、お浄土といふことが直接の感じであつて、お経の上から種々と理窟を申しのべるといふ問題にはなつて居りませんのであります。

それから一つ、他の方の、西洋あたりの考へを比較して見るのでありますが、これはすこし論のやうなことになると思います。  
たとへば、西洋の昔のギリシヤ人といふものはプラトンなどの偉い哲学者などでも、この世の中で立派な生活をして、この世を去つた人、例へばソクラテスのやうな人、その他、戦場に出て勇ましく戦つて死んだ人といふものは、世界の西のはてに島があつて、その島にはエリユーシオンといふ野原があつて、そこは夏の暑さもなく、冬の寒さもなく、始終いゝ氣候であつて、そしてはげしい雨風といふものもない、何とも言へない気持のよい所である。そこへ行つて生れる、といふやうなことを、プラトンなどといふ偉い哲学者などもさういふことを云つて居るのであります。

そんなのを考へますと、ちつと、理窟を云ひたくなるのであります。それはこの世の中で立派な生活をしたといふのは結構なことであるが、その人はエリユーシヨンの野

さいお嬢ちやんを亡くなされまして、その秋に「人生と彼岸との交渉」と、この世と、仏のお浄土とのつながり合ひといふお話を仙台に来てして下さつたのであります。

それやこれやで、私はお浄土といふのは自分の子供を失つて直接の感じになつてゐるといふ様な時でありましたから、別にむづかしいことを云ふことはありませんけれど、自分は子供を失つてお浄土といふことがハッキリした感じになつてゐるといふお答をしたことがあります。

それからのちは両親が死ぬる。種々な大事な人間が次々に死にまして、段々お浄土といふ感じが深くなつて参りまして、それからさつき申しました通り母を失つて、十年ばかり経ちまして、いよ／＼この親といふものが死んでからのち、いよ／＼生きて、仏のまことを伝へ、いきたまことのいのちといふものになつてゐる。もうすこしきりつめて言へば、世を去つた親といふものは尺十万の無碍の光明と

に生れて、たゞ安楽な、暑さも寒さも知らない、はげしい雨風をもしらない、何だかおんびりした、安楽な生活をしたと、そんなことでいゝんだらうか。何かこうアツケないやうな、向ふに隠居して、樂隠居してゐるやうに聞える。そんなことちやあるまいと理窟を考へて見たくなるのであります。

それから同じ西洋でも、北の方であります。北欧神話といふものになりますと、今度はこの世の中で立派に勇ましく、戦場で打ち死にした者は、ワルハラといふ神様の殿堂があつて、この世を去つてそこへ生れて行くとなつてゐるのであります。

それも、成程、そんな立派な殿堂に生れて、それでどうなるのか。そこでちつと、今迄の武勇の働きをしたその御褒美に、さういふ立派な殿堂の中に入れられて、そして只遊んでゐるのかといふやうな理窟を考へて見たくなりました。どうもをかしい、そんなことちやあるまい、といふ気になるのであります。

それからもう一つ、このキリスト教であります。キリスト教では、死んで天国に行く、その天国の考へ方も種々あるやうでありますけれども、天国に行つて神様の前に、聖母マリヤのお隣あたりに坐らされて、そして、何ともい

へないひかりの中に住むやうになるといふだけのことになつてゐる、さうすると天国といふのは神様のお恵みによつてこの世の塵にまみれた人間が、そちらに救はれて行つて、そして結構な光の中に住むといふことで、それで終り、と。それも結構は結構だけれど、そんなことで私共の間願の解決がつくのであらうかといふことを矢張り考へさせられますのであります。

さう云ふのとくらべて見ますと、仏教のお浄土といふものが、何とも言へない有難いといふのは、かうであります。皆様始終お聞きになつて居ります通りに、この世の生命を終つて、お浄土に生れるといふのは、お浄土で何か蓮の華の上でデットしてゐて、ホノボノとした光が、そのあたりにポーとあつて暑からず寒からず別に何も食へないでも、よいものゝ食物の香ひをかくだけでお腹が一杯になると、そんなお浄土といふのならば、そこに蓮の華の上で生れてどうなるであらう、といふのだけであれば、菊地寛さんの『極楽』といふ小説に書いてあります通りに、お浄土といふところは退屈で／＼たまらぬ所になる。かういふことにもなるのであります、実は、さう云ふことでなくして、お浄土に往生するといふのは、親鸞聖人の御言葉の『還相廻向』<sup>ひんさうくわう</sup>急ぎ仏になりて、そして一切の衆生を救ふといふ大きな働きをするやうになると、こゝが非常に有難い

いふお働きのいのちといふものから、こゝのところの、この釈尊のお言葉を受けとりますとどうなりますか、觀世音菩薩、大勢自菩薩は、こんなことを申しますと悪いかも知れませんが、私共の先輩である。いや先輩といふ言葉ではつくしませんが、私共を無限に引いて下さるいのちのはたらきである、そしてその働きは、さつきから申して居りますやうに、私共が知つて感じて居ります限りにおいては、親兄弟であらうが、私の子供であらうが、知り人であらうが、その他、友人、或は近所の人であらうがこの世を去つて行く人々の上に、私共が直接に感じますところの仏のまこと、生きた力である。

さうだから、さう云ふ風に感じますものでありますから、私共が大事な人に死なれて、この世が段々淋しくなつて行くといふことも、この世の人間として事実なのでありますし、私なんかでも、昔の学校で同じ級に居た友達が大部分死んで居りますし、そんなことで云ひますと淋しいことでありますけれど、然し人生の死といふことによつて始めて私の様なものが、お浄土といふものゝ実感をもつ。何もお浄土へ行つて見て来たといふ間願ではありませぬ。けれど大事な人々が死んでゆくといふことから、お浄土についての直接の感じをもつといふことは云へるのであります。

そこまでの感じを私の感じといたしまして、こゝのお経

ことになると感じて居りますところで、實際このお浄土に往生するといふのは、仏の廣大無辺な光明と一味になつて、これからのち、今迄出来なかつた一切衆生を縁に随つて濟度するといふ大きな働きの中に入らせて頂く、仏様と一味になつてさういふ働きをさせて頂くといふことにな

る。これは非常に有難いことであつて、お釈迦様なども娑婆往来八千遍といはれますやうに、お浄土に行き／＼りではない、娑婆にあらはれ、あらはれして、八千遍といふのはマア多い数を云つたので、何万遍になりますか、また何千万遍になりますか、そこに無限の働きをこの世に及ぼしておいでになる。かり云ふ何とも云へない広大な働きの世界であり、しかもそれがひかりの世界である、何とも云へない世界であるといふところに仏教で私共が、釈尊のお言葉で云つて頂いてありますところの、ほんたうの尊さと有難さと本当にお浄土に生れさせて頂く甲斐があるといふことを知らせて頂く、そんなところからであります。

そんなところからこゝを拝読して居りますと、觀世音菩薩、大勢至菩薩がさう云ふ風にしてお浄土に往生して行くお方である。お浄土に往生なされつゝ、一切の衆生をその御生命の中に引接したまふ、引き入れ、包み入れ給ふといふ様な、この無限の働きをなさつて居るお方である。さう

を拝読しますといふと、種々その外に感ずることもあります。

たとへば、お浄土に往生して居ります衆生の中に、声聞衆といふのは『身光一尋』と、そのお身体から出てゐる光がひとひろでありますから、三尺ばかりであります。これが非常に面白いというては悪いのであります、非常にこの味の深いところだと私共は感ずるところであります。

『身光一尋』といひますことは、どういふことであるかと申しますと、一体この光といふものは先づ内を照して、それから外に及ぶものであります。考へ方では、西洋の或人方はその反対に考へる人もあります。先づ外が照らされて来て自分の心の内が照されて来るといふ人もありますけれど、私共仏教では、矢張り心の内が照されて来て、自分の心の内に光が一杯になつた、その光が、自然にポウとこのあたりから出て来ると考へられるのであります、私共が非常にこの宗教信仰上の徳の高い方などにお目にかゝりますと、矢張りその光を感じますので、後光が出てゐるといふことを申しますか、實際さうなのであります。

私は近角先生から勿論お育てをうけて居りましたが、その外に、法隆寺に何年も何年もおこもりして、もうお亡くなりになりましたが、佐伯定胤親下、あのお方に聖徳太子関係のお経のお講義を聞いたり、お勤行を導いて頂いたの

であります。矢張りあゝいふお方になりますと、何時でもさうだとは云へません、矢つ張り人間であります。けれども或時、大事な教をお説きになつてゐる時、後光が射すといふやうな感じがするのであります。

人によつては、これは仏教の上で申すことではありませぬけれど、合掌といふことは非常に大事なことであつて、合掌を一心にやつてゐると自分からでも後光が射すと云はれる方があります。そこは私の保証の限りではありませぬけれども、然し合掌といふのは一番やさしい姿で、一番強い姿ださうであります。

余談になりますけれども、私が満洲に行つて居りました間に、建国大学で合氣武道といふ武道をお教へになる先生がありまして、仲々立派なしつかりしたお方で、まだ生きておいでになります。そのお方の話を聞いて居りますと、合掌の姿といふものは、これは一番強い姿で、これには仲々向つて行くことは出来ぬ。お仏前に坐つて合掌してゐる姿は、私共は優しい姿と感ずるのであります。その武道の先生は、これが人間として一番強い姿であると申されます。さうしますと、ちつと心をしづめて参りますと、合掌の姿から後光が出るといふことも云へるのであります。免に角、この人間の心の問題といふものは、物理学などでは説明の出来ないものがありまして、物理学で云ふひかりといふのとは違つて居りますけれど、矢張り心で感ず

るひかりであります。

その『身光一尋』といふのが味ひが深いといふのは、一尋も後光が出るといふのは大したことだと思ふのであります。私共のとても経験出来ないことでありますけれど、宗教上の徳の高いお方になりますと、すくなくとも、身光一尋、ひとひろばかりの後光がそのお方のうしろから出てゐる。それがそのお浄土では声聞衆と云ふのでありますから一番後光の短いといふ方々であります。

菩薩の光明になると百由旬といふのでありますから、一由旬といふのは三四十里に當るやうでありますから、百由旬とは大したものでもあります。それから觀世音菩薩、大勢至菩薩、かういふ菩薩方になると、まだこの光が、どんなところまでも、何処へまでも仏様の光が、とほるといふのは、私で云へば、この私に徹つて下さるといふのが、何処へまでも仏のおひかりといふのがとほるといふことになるのであります。

私のやうに煩惱のさまたげの多い、その者に徹つて下さる。その光といふものは三千大千世界を照して下さる。私自身が三千大千世界をとび廻ることは出来ませぬけれども、然し私のこの煩惱の心の奥まで照して下さるといふ仏の光明といふものが、それが三千大千世界を照す光明である。と私自身の感じの上から成程さうでありませうと、こゝからうなづけますところでありませう。

## 浄土眞宗に歸すれども

### 西元宗助

「信者の仲間にあふと、一見旧知の如く忽ちに心が通じて有難い、やはり信者に限る」といふ。また「いくら学問があつても人格が高くても信仰のない人は、結局、駄目で、心が通じないし、どこか物足りない。だから、矢張り信仰である。」といふ。そして自分達の仲間は、もちろん自分を第一に含めて、極楽にいけるもの仲間とさめ込んでゐる。だから、さかんに道友とか、法友といふ言葉を用ひる。そして仏縁のなさをうな、それ以外の人々はみな俗友といふことになつて了ふ。

私はかういふ空気がたまらなく嫌ひである。いくつかの仏教雑誌を拜見してゐて、時には妙な錯覚にとらはれる。それは結局、二、三流の俳句雑誌などの雰囲気と変らぬところの低俗な仲間意識があるからである。俳人の仲間も会へばお互ひに心が通じて愉快であるに違ひない。そしてお互ひに愛めあつてゐたら天下泰平であらう。ところがそれらとあまり異ならぬ程度の心持で、お互ひに信者仲間といふ微温湯の中に浸つてゐたら、これはまたなんといふ天下

泰平なお芽出度いことであらうか。

なるほど同信の信者の仲間は有難い。俱一処の想ひがし、深く感応道交するものがあらう。しかし、いゝ加減な気持である、鼻もちのならぬ道友意識をかもして、結局あなたと私だけの精神的特権意識にあぐらをかいて、仲間外れのものを見物する、そのやうな宗教特有の解慢界に不知不識のうちに陥つてゐることがないであらうか。そして、そのために、新参者は、特に若い青年たちは淋しい思ひをしながら、仏教に心ひかれながらも、仏門から引返し

てゐることがないであらうか。

ところで、このやうな信者意識といふものは、親鸞聖人の宗教に限る限り、その御一流にはそくはないものである。御同朋、御同行の世界には、信も未信もない、いや自分こそが、外は信にして、内は仮なる、しかも鼻もちならぬ俗物であることに気づかせていただくところに本願の機があるのではないか。

また、いくら学問があつても人格が高くても、お念仏を

知らない人は、画音黙情を欠くといふことも真であらう。物足りないと感じ、意志の疎通を欠くことのあるのも事実であらう。しかし多くの場合、ここにも亦甚だ危険な宗教者特有の思ひあがり、勝他の感情のうごめいてゐることを見逃すことが出来ない。

確かに湯川秀樹博士と雖も、中江藤樹先生と雖も、光顔巍々として威神無極なる如来の仏智に照らされれば、聚墨のごとくにその光を失ふであらう。されば念仏申すことを知らぬ人は、智者と雖も愚者といふべきであらう。徳者と雖も畢竟するに難毒の徳者といふべきであらう。しかし、それは己の小智に誇り、小善に執して、如来の大悲を仰がざる自己に対する自省の言葉として味ふべきものであつて、凡夫である己がみだりに他に対していふべき言葉ではない。却つて、智浅く、徳寡きわれ／＼は、素直に藤樹先生を尊び湯川博士を敬するところにこそ、念仏によつて恵まれたる生活があるのではあるまいか。

まことに、念仏申す生活は、如来の真実をいただいて、誰の前にも頭のあげやうのない至らぬものであることに無底にきづかさされ、凡ての人々の上に、まことを仄かにも感ずるといふことであらう。街の散髪屋の小父さんにも、天理教にこつてゐる小母さんにも。況んや藤樹先生にも、湯川博士にも、それ／＼に凡夫には及びがたき敬愛すべきものをもつていられるわけで、それを云々してみたところであらう。

きちらすことをいふ。随つてそれはカフエ道楽よりも更に始末が悪い。といふのは、我を悪しと思ふ心がないから、無邪氣がないから、誰よりもよいことをしてゐると思つてゐるから。

最近、家人から聞かされたことである。家人は終戦の頃まで、私が念仏を申すと、そら警戒警報が鳴つた、と用心したといふ。といふのは、私が念仏申すのは、何か家人のすることゝ気に喰はぬことがあつて、それをこらへるために念仏申してゐる場合の多いことがよくわかつてゐるので、それだけに辛かつたといふ。警戒警報や空襲警報にか聞えん念仏を申してゐたとは、まことに申訳のないことであつたと、思はず慄然とする。蜂屋賢喜代先生などのお唱へになるお念仏は、誰が聞いてゐても法味豊かな、如来さま直々のお名告のやうなお念仏で、それは／＼ありがた

その多くは、あだかも虎の威をかりて威張つてみせる狐の習癖と大差がない。如来や念仏をかさにし、わが物にし、威張つてみたいといふのが悲しき凡夫の性であることに気がなければならぬ。

されば又、念仏申さぬ人を「物足りないと感じ、意志の疎通を欠く」といふ心持も、わからぬではないが、併しその程度のことであれば、俳句の仲間でも、麻雀の仲間でもゐることであつて、格別のことはない。

却つて、念仏申す人は、念仏申さぬ人々の淋しい心を豊かにし、その隔て心をとかすところの柔軟の心を仄か乍ら恵まれてゐるのではないか。もし、さうではなくて、念仏申すために、世間の人々を物足りなく感じ、意志の疎通せぬところがあるとすれば、それは信心をわが物にしてゐるからではあるまいか。

われ／＼はまず、そのやうなわが物にした信心を放下しなければならぬ。いはゆる信心のないことが、どれだけ自由であり、気楽であるかを知らねばならぬ。そして、そのやうな無信の無根の者の上にこそ、如来の真実心の徹到し給ふことを知るべきである。

だいたひ私には仏教に淫する傾向がある。ここに淫するといふのは、仏教において、生死出づべき道を聞くのではなくて、仏教を趣味として道楽として、月並俳句程度に取扱うて、しかも後世者振つて、抹香臭いにはひを周囲にま

い。

最後に映画をみたり、音楽会にいく人を見ると可哀相でかなはん、といふ氣持、この氣持もわからないことはい。じつさい、パチンコや、色街遊びに熱中してゐる人を見ると、自分は幸せであると思ふ。しかし、あの人々は地獄にいくと思ふ心には、多くの場合、極めて思ひ上つた傲慢な心持がうごいてゐる。口先では、聖人の口真似して地獄一定といふながら、自分だけは極楽にいけると独りきめこんでゐる。その根性が悲しいのである。このやうな悲しき痛むべき根性の持主である、この自分おめあての御本願を仰いで、お念仏させていただく次第である。

「ともしび」三十二年九月号より転載

## 法 信 抄 その 他

柳瀬留治氏の歌集『霜髪』の中に、昭和十六年詠の歌が誌されてありますが、その中でも

希有の信に住し、この二十数年間、在刑者の教誨に

身を以て尽されし畏友、竹鼻尚友氏急逝す。その七七日の忌に

われ若く勤めおこたり信心に浸りたりしをさとしぬ君は

花やぎてものはのらさず言少く実の籠るに心打たれぬ

相見ては声かくるのみに心足る我等なりけりただに恋しき  
とあります数首に心打たれ、此度その所感の追補を御た  
のみしますと、折返し次の法信を頂きました。

御手紙懐しく拝見致しました。……お訪ねの竹鼻尙友氏  
とは随分古い事です。また求道学舎も古い建物時代で、氏  
はまだ独身で、常音先生の書齋（客間）の隣室に同居し、  
東京市の養育院菊阪分院小学校へ出ていられる時、私も、  
小沢一氏の世話で同分院の学校へ勤めさせて頂き、二年間  
位一緒でした。

私は其頃信仰問題に苦しみ、毎晩の様に常音先生を訪ね  
たものでした。

当時私は、信仰さへ判れば人生万端意義の生じ来るもの  
と思ひ、自分もそれさへ得れば、心が立派に立直れるも  
の、立派な人格になれるものと思つてゐた様です。それで  
人生はつまらんもので信仰が唯一価値の様に思つてゐて、  
やや生活を疎かにしてゐた様に思ひます。そうした折に  
『生活をおろそかにし、真剣でないものが、信仰なんて  
高あがりだ。生活が生やさしいものでない。それで信仰に  
よるんだ……』

## 退職の言葉

『皆さん。最い問お世話になりました。自分は学長とし  
ての務めを勤めまして、さて、罪なきことを得たり、と言  
ひたいのですが、自分はさう言ふことはできない。

罪禍天に満つ、といふ言葉があるが、それこそ自分の思  
ひあたる言葉である。云々』

と言つて吉田賢竜先生が広島文理大学の職を退かれたの  
でありました、当時同大学の講師をしていられた金子大栄  
師が、歎異抄聞記に誌して居られます。

たしか大正十三年の初夏でありました。池山先生が岡山  
の高等学校から、甲南高等学校に転任されましたが、その  
すこし前に、玉尾、山本の両君と私に、

『よく学校をやめたり、転任する時、幸に大過なしにつ  
とめさせて頂きましたことは、諸先生ならびに関係各位の  
御蔭云々……と云ふが、自分はどう聞違つても、さう云  
ふ挨拶はおくびにも言へない。永年の勤務の中で、たつた  
一日だつて、教師としての自分の態度や心構へを反省した  
ら、全く冷汗ものだよ』

と述懐されたことが妙に私の耳の底に今なほのこつて居  
ります。そして期せずして吉田学長と池山先生のお心の規

といった事を言はれた様でした。『信仰を道楽にし、机  
上の遊戯にしてゐる』と戒められた様に覚えて居ります。  
その頃は氏はまだ徹した安心とまで行つていられたなかつ  
たかと思ふが、其後、小田原刑務所で大震災に遭ふなどの  
苦勞やら、奥様の神経痛や、種々な事から、其後偉大な信  
仰を得られた事を感じました。氏は無口な方で、口へは  
出されぬがお顔を見、御様子を見ていたく尊敬を払ふので  
した。

その後、氏の信仰につき、常音先生から驚く許りの超絶  
した深いもの、教誨の態度、その言葉などを聞かされまし  
た。

氏の死後、常觀先生の御郷里の御葬儀埋骨の折、御長男  
は中学生でしたが、先年の常音先生の御埋骨の折は、立派  
に成人され、七条の袈裟で列座され、式後に幾度か父御の  
話もし、本人の信仰に悩んでゐる苦衷も承りました。  
そこで、私の悲願は強力であつて、我々の若存若亡の願  
ひなど問題でない。この大悲まします限りは、信仰の判る  
判らぬなど小さな、何の役にも立たぬ事だ。安心して暮し  
なさい。必ずや父御の彼の縁が現はれ来つて判らせて貰へ  
る、といつて別れたことです。

竹鼻尙友氏は「若存若亡」でなく「明滅」といふことを  
よく云はれた由、常音先生から承つてゐました。

を一つにされてゐるのにおどろきました。

又、京大の西田幾太郎先生が、停年になられた時の御挨拶  
も伝聞して私の記憶に深く刻まれたものの一つでありま  
す。

『私は少年の頃、よく墓場で友達と遊びましたが、その  
頃不審に思つたのは、ここに葬られた人々の中には、みん  
なから嫌はれたり、爪はじきをうけた人々もあるであらう  
が、どの墓碑も、どの墓碑も、皆残らず、善信士、善信  
女、といふ戒名が刻まれてあつて、何処にも悪人、悪人の  
汚名は見出されない。死のとばりの彼方に投げ込まれる  
と、誰人もが美化されて善男子、善女人と呼びかへられる  
のだからと感心したことがある。

さて今私もまた、退任と共に、過去の教授の数に入るの  
であるが、どうか私の在任中の種々の失敗を、過去のとば  
りの彼方に投げ入れて貰つて、美しい名を冠して頂きたい  
ものである云々』

大体にこんなことを申された由であります。宗教の真隨  
は『愚禿』の二字につきると、『善の研究』で発表せられ  
た先生の面目が、退任の時にもこんな言葉となつて発露し  
て居ります。



編集後記

彼岸も過ぎて本格的の秋となりました。この冊子が御手元にとどきます頃は、秋いよ／＼深く、心いよ／＼澄む頃となりませう。

小倉市の、友達との通信によると『近年にないほど、北九州に開法者が多い。然しそのうちにどうも浮調子な傾向も感じられる』とありました。

本日頂いた大牟田市の法友の書信では『最近異常なる仏教熱で、地方に於てはむしろ狂信や迷信のハンランしてゐる状態』とのこと。

祖聖の七百回忌をお迎へ申す日も近いこの頃、古今を想ひ、真信の不滅を信じ、願力の無窮を仰ぎ、祖意の地に正しく伝承せられんことを願つてやみません。

△往生についての福島先生の御講話は、我等が往生の道について、西洋における浄土類似思想を他山の石として、弥陀の浄土を信賞して頂きまし

た。『晩年の親鸞聖人』が京都の文昌堂から出版出来る由であり、今夏御稿了なさいました『社会理想と仏教』もいづれ何処かで御出版の由であります。御身辺多事の中にも仏意を広く世に伝へて頂いて居り、有難いことでありませう。

△浄土真宗に帰すれども、の西元宗助さんの原稿は、京都の高倉会館で発行の『ともしび』から転載いたしました。目下西京大学の教授、京都市下鴨蓼倉町六八が御住居です。

△心に映ること々も、は草庵籠居の私の心水に映る最近の感想を誌し、今秋の一里塚といたしました。

△法信抄其他、も夫々に私への教への羅列であります、御判読願ひます。

十一月三日、池山先生の忌日に、京都市右京区山田開町浄住寺、榊原徳草さんの書院で有縁の方々相集い、一道会の催される日もめぐつて参りました。会員組織も何もありません、年一回恩師の忌日に集つて、互に法味を頒ちあひ度い、たゞそれだけの願であります。浄住寺の近くに居をお定めになつた白井成允先生は、もうすでにそ

の日を予定して頂いてゐる由であります。紅葉色濃い古刹に、念仏の声もひときは澄んで、清域にひびくことでありませう。私も御伺ひ申し、皆様の警策を蒙りたいと願つて居ります。

浄住寺は京都駅から苔寺行きバス。山田開町下車。又は新京阪「桂」乗り換へ、「上桂」下車

△十一月四日、日曜講話休み。池山先生臨悼会で上洛のため

定價	一部	十七四	(送共)
	半年	百四	(送共)
	一年	二百四	(送共)
編集・発行人	花田正夫		
名古屋市千種区千種町馬走二八			
印刷人	奥川正生		
名古屋市南区匠上町二ノ二八			
發行所	慈光社		
振替口座名古屋	一〇四七〇番		